

地下鉄サリン事件から30年、オウム ～「Aleph」において麻原の二男が新たな「グル」へ～

オウム真理教は、麻原彰晃こと松本智津夫が教祖・創始者として設立の主要3団体を中心に活動。主要3団体とともに依然として麻原の影響を受け再発防止処分決定において、麻原の二男及び麻原の妻を「Aleph」



麻原彰晃こと松本智津夫
(写真提供:時事)

閉鎖性

- ◆ 一般社会と隔離した独自の閉鎖社会を維持
- ◆ 位階制度を維持
- ◆ 立入検査に対する非協力姿勢

など

麻原の影響力

「Aleph」

麻原への絶対的帰依を明示して活動

京都施設に対する立入検査で確認された麻原のポスター(6月)



八潮大瀬施設に対する立入検査で確認された麻原の著書(6月)

麻原の二男の関与

◆ 「Aleph」の運営に関するオンライン会合を開催し、組織運営に関わる重要事項について、幹部構成員らに対して自らの意向を伝達

◆ 麻原の二男の意向が示された後、「合同会議」^(*)において、当該意向に沿って決定

※「Aleph」の「運営規則」によると、「Aleph」の運営機関と規定

閉鎖性や欺まん性の裏に、麻原の二男の関与

(☞ P.8 COLUMN ☞ 1 「[Aleph]における麻原の二男と麻原の妻の地位・役割」参照)

◆ オウム真理教において行われていた「転生祭」^(*)なる儀式を執り行い、「イニシエーション」なる儀式に際して自らの毛髪を提供

※構成員が亡くなった場合に執り行う団体の儀式



足立谷施設に対する立入検査で確認された麻原の二男の幼少期の写真(5月)

麻原の妻の関与

◆ 二男が開催していたオンライン会合に参加し、自ら発言

◆ 平成14年頃から、「絵画使用料」の名目で「Aleph」から、毎月40万円の送金を受け、その資金を管理

眞理教の現在

した団体であり、今なお、「Aleph」、「山田らの集団」及び「ひかりの輪」下にあるほか、「Aleph」をめぐっては、公安審査委員会が、9月3日付の役職員及び構成員と認定。

欺まん性

- ◆ 実態の一部を隠して報告
- ◆ 被害者賠償を履行せず
- ◆ 一連の事件について、麻原の関与を否定する陰謀論を展開 など

団体の体質は、閉鎖的かつ欺まん的であり、その反社会的性格は何ら変わらず

「山田らの集団」

麻原への絶対的帰依を明示して活動



金沢施設に対する立入検査で確認された麻原の写真(上)と麻原の著書(下)(9月)

「ひかりの輪」

外形上、麻原の影響力を払拭したかのように装う、いわゆる“麻原隠し”的取組の下に活動



「ひかりの輪」
代表・上祐史浩
(写真提供:時事)



南鳥山施設に対する立入検査で確認された麻原と同一視している仏画(9月)

「Aleph」における麻原の二男と麻原の妻の地位・役割

麻原の二男(平成6年<1994年>生、当31歳)は、平成8年(1996年)、オウム真理教の教祖・創始者である麻原彰晃こと松本智津夫から「後継者」として指名され、「新教祖」の地位にあった。その後、平成12年(2000年)、上祐史浩による“麻原隠し”的方針により、団体に「教祖」を置かないと発表され、麻原の二男は、公の場に姿を表すことはなく、団体側も麻原の二男について言及することはなかった。その一方で、麻原の二男は、平成26年(2014年)頃から、自らを、麻原が自称していた「グル」と称したり、麻原の言辞を引いて「宗教の王」などと称して、「Aleph」の内外に自らの地位や役割を秘匿しつつ、「Aleph」の人事や経理を含む組織運営に関する重要事項について、幹部構成員等に意向を伝達しており、「Aleph」は、その意向に沿って活動してきた。



横浜施設(「Aleph」)に対する立入検査で確認された麻原の写真(左)及び麻原の二男の幼少期の写真(右)(5月)

- 自らの意向に沿った行動を取らない幹部構成員を「Aleph」内において孤立させ、位階^(※)を剥奪すること
※ 修行の進度に応じて麻原が認定した序列
- 幹部構成員を「長期修行」と称する謹慎処分に付すこと
- 法令に基づいて義務付けられた公安調査庁長官への報告を作成するに当たって、従前記載していた収益事業について記載しないこと
- オウム真理教犯罪被害者支援機構に対する損害賠償金の不払い など

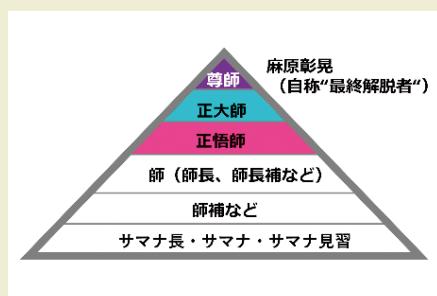
麻原の二男による幹部構成員等に対する意向の伝達内容(例)

麻原の二男は、「Aleph」において、「グル」や、生まれながらの指導者として「リンポチエ猊下」と呼称されているほか、団体内において、「アジタナータ・アクショーブヤ」という、麻原から限られた構成員にのみ与えられた特別の呼称(「ホーリーネーム」)も有している。

「Aleph」では、麻原の二男の幼少期の写真を一部の施設内に掲げるとともに、各施設において、麻原の二男の誕生日を捉えた「生誕祭」と称する行事を開催し、麻原の二男の偉大性を強調している。

一方、麻原の妻は、「正大師」という高位の位階にあって、麻原の逮捕後は、オウム真理教の「代表代行」に就任していた。また、麻原の妻は、平成15年(2003年)頃には、自らの意向に沿わない幹部構成員を団体の中核から外すなど、実質的に人事上の重要な決定を行ったほか、麻原の説法を教學させるための教材の改訂を決定するなどした。さらに、平成25年(2013年)10月以降、翌年に成人する麻原の二男を「Aleph」の活動に復帰させることを画策して、これを実現した。

麻原の二男は、麻原の言辞を引いて麻原の妻を「宗教の後見人」と呼称し、自身を補佐する立場に就いているところ、麻原の妻は、団体から送金された資金の管理や、団体の活動の用に供されている施設の管理を行うとともに、麻原の二男が開催するオンライン会合に参加し、自ら発言するなど、重要な意思決定に関与し得る立場にあり続けている。



位階制度



平成2年(1990年)7月、熊本県知事らを告訴し会見する麻原及び同席する麻原の妻(右)、上祐史浩(左)(写真提供:共同通信社)

「グル」という存在

「解脱へ導くことのできる靈的指導者」

オウム真理教における「グル」とは、「解脱へ導くことのできる靈的指導者」とされている。

麻原は、この「グル」を自称し、修行を成功させるには「グル」の存在が不可欠であるとした上で、構成員に対し、「グル」である自己への絶対的な帰依を求めた。

また、麻原は、構成員に対し、自己への絶対的な帰依のみならず、「グル」である自らと全く同じものの見方、考え方ができる、いわゆる“クローン化”を求め、そのために、自己の意思を捨て、麻原から与えられた指示・命令を盲目的に実行する「マハームドラー」の修行を課した。この修行は、殺人を行うことさえ肯定するものであり、地下鉄サリン事件等の一連の事件も、「マハームドラー」の修行として行われた。

「グル」である自らへの絶対的な帰依を求めた麻原の説法

- ◆ グルに対する帰依は、始めであり、終わりであり、全てなのである
(「新・特別教学システム教本第一課」(「Aleph」))
- ◆ グル、グル、グル、グル、グル、グル、あー、グル、グル、グル、グル。グルのためだったら、いつ死んでも構いません。グル、グル、頭の中はいつもグルのことばっかし。グルのためだったら死ねる。グルのためだったら殺しだってやるよと。
(昭和62年(1987年)1月、丹沢集中セミナーにおいて麻原が行った説法)

現在でも「グル」を絶対視するオウム真理教

麻原の死刑執行(平成30年(2018年)7月)後も、主流派(「Aleph」及び「山田らの集団」)は、施設内に麻原の写真を掲示したり、麻原が推奨した修行を行ったりするなど、「グル」である麻原への絶対的な帰依を扶植する指導を継続している。

また、上祐派(「ひかりの輪」)は、“脱麻原”を強調しているものの、依然として、麻原の影響下にあるという実態に変化はない。

現在、麻原から「後継者」として指名された麻原の二男が「グル」を自称するようになり、「Aleph」の一部の構成員も麻原の二男を「グル」と呼称している。

こうした中、麻原の二男は、幹部構成員等との間でオンライン会合を開催し、「Aleph」の人事や経理を含む組織運営に関わる重要事項について意向を伝達し、「Aleph」は、その意向に沿って活動しており、オウム真理教においては、未だ「グル」を絶対視していることがうかがわれる。

「イニシエーション」～麻原の頭髪等の使用法～

オウム真理教では、“これにより飛躍的に修行が進み、悟りや解脱に近づく”などと称し、「イニシエーション」(注: 麻原のエネルギー移入等)と呼ばれる儀式が行われてきた。「イニシエーション」の中には、麻原の頭髪等を使用した儀式も数多くあり、現在でも「Aleph」は、麻原の二男の頭髪を使用した「イニシエーション」を行っており、これらは特に価値の高い儀式と位置付けられている。本コラムでは、麻原の頭髪を指す「御宝髪」及び麻原が入浴した後の残り湯を指す「ミラクル・ポンド」を使用して、かつて行われていた「イニシエーション」について紹介する。

1 「御宝髪」(1本1,000円)

- 「持ち歩けばお守りに、煎じて飲めばエネルギーが上昇する」などと指導し、販売。

尊師御宝髪マニュアル

用意するもの

- ・尊師御宝髪
- ・300mlの水
- ・どびん（なければやかん）
- ・湯のみ

どびんの中に300mlの水と御宝髪を入れて煮つめます。約200ml（湯のみ1杯分）になるまでグツグツ煮だします（約1時間以上）。もし水が少なくなったらつぎ足します。これで1回分（1日分）です。1本の御宝髪で3回分まで煮出せます。冷めないうちに飲みましょう。3回目には煮だし湯とともに御宝髪と一緒に飲みましょう。

・効果
これはタントラにおけるシークレット・イニシエーション（秘密のイニシエーション）に属します。
「イニシエーション」124頁を参照して下さい。

オウム真理教

札幌白石施設（「Aleph」）に対する立入検査で確認された「御宝髪」（左上）、「御宝髪」が入っていた封筒（右上）及び「尊師御宝髪マニュアル」（下）（5月）

2 「ミラクル・ポンド」(カップ1杯2~3万円)

- 構成員は、そのまま飲むか、「ミラクル・ポンド」を使ってオウム食(出家した構成員の食事)を作り摂取。
- 麻原の逮捕前、構成員は、「ミラクル・ポンド」はかなりエネルギーも強くて、一口飲んだだけで、ものすごく上に引き上げられるのを感じました」などとコメント。

二千六百年前、サキヤ神賢が沐浴された池の水が人々の病を治したり、多くの奇跡をもたらしたことから、ミラクル・ポンドと呼ばれるようになりました。オウムのミラクル・ポンドは、そこから由来して命名されました。この奇跡の聖水を、ぜひ一度お試しください。

・ミラクル・ポンド

「新入信徒ガイドブック」
(オウム真理教)

現在でも、「Aleph」では、施設内に「御宝髪」及び「尊師御宝髪マニュアル」と称する用紙が保管されていること、麻原の二男が「イニシエーション」に際して自らの頭髪を提供していたことが確認されている。これらの事実は、「Aleph」の構成員が、依然として麻原や麻原の二男を絶対的な帰依の対象とし、麻原が推奨した修行等を実践するなど、麻原の意思を推し量りながら活動していることの証左であり、「Aleph」が、今なお両サリン事件をじゃっ起した殺人をも肯定する危険な麻原の教えを維持していることからすれば、無差別大量殺人行為に及ぶ危険性を現在も有していることは明らかである。

COLUMN » 4

「ひかりの輪」の実態～「三仏」をめぐる上祐派の欺まん的な対応～

「ひかりの輪」は、表向きは“脱麻原”、“脱オウム”をアピールし、“麻原隠し”を行っているものの、そもそも、麻原の意思・指示に基づいて設立され、現在も、麻原への帰依を維持しながら、麻原の教えを広めること等を目的として活動している（設立経緯について、詳しくは令和7年（2025年）版「内外情勢の回顧と展望」特別企画（<https://www.moj.go.jp/psia/kaitenR7.html>）、公安調査庁特設サイト「オウム真理教問題デジタルアーカイブ」に掲載）。

例えば、「ひかりの輪」代表・上祐史浩は、「観音菩薩といった宗教的な概念、すなわち、尊師と縁があるが、麻原尊師という名前と姿自体ではない崇拜対象を検討することはグルの意思に反しない」として、平成19年（2007年）5月の「ひかりの輪」設立前から、釈迦牟尼・観音菩薩・弥勒菩薩の「三仏」を麻原と同一視されるものとして位置付けて教化活動の中心に据え、「ひかりの輪」設立以降は、「三仏」を施設内の祭壇に掲示（写真①）してきた。ところが、「三仏」を麻原と同一視して崇拜対象としていることを公安調査庁から指摘されると、以前は「21世紀の新しい宗教」とけん

伝していたにもかかわらず、「ひかりの輪」は、宗教ではなく「思想哲学の学習教室」と宣言し、それに伴い、平成26年（2014年）9月、「三仏を完全に廃止」するなどと主張した。

そして、「ひかりの輪」は、

- 「三仏」の一部を仏画から仏像写真に代えて掲示（写真②）
- 「三仏」の仏画を分散して掲示（写真③）

するなど、「三仏」を廃止したかのような外觀を作出しながら、現在に至るまで、実質的には麻原と同一視している「三仏」を崇拜対象とし続けている。

さらに、近年は、オンライン会議システムにおいて、観想（注：特定の対象に向けて心を集中し、その姿や性質を観察することを意味する佛教用語）の対象として、「三仏」を挙げ、「三仏」一揃いの画像を配信するといった活動も行っている。

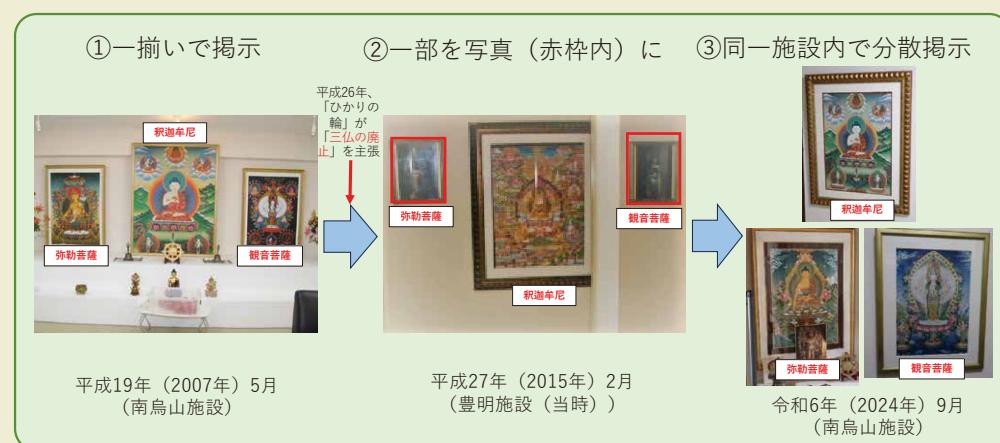


<https://www.moj.go.jp/psia/aumarchive/>

釈迦牟尼	「麻原彰晃という名前自体が阿修羅・釈迦という意味なのですね」
観音菩薩	「観音菩薩って衆生を全て救済するために千の手段を持っているんです。うん、だから、麻原尊師の手段もあるし、他の手段もある」
弥勒菩薩	「私はマイトレーヤ正大師と呼ばれて、尊師はマイトレーヤ（注：弥勒菩薩）の化身となっています」
三仏	「自分たちを純粹に釈迦に、そして釈迦の現在世と未来世の投影である観音と弥勒に帰依していく」



麻原と同一視している「三仏」に関する上祐の発言（平成18～19年）



麻原と同一視している「三仏」の掲示方法の変遷

こうした動きは、麻原の影響力を払拭したかのように装い、観察処分を免れるための“麻原隠し”的取組の一環であると認められる。